

文藝作品：

転校生

The Transfer Student

川 崎 清

1

川浪博は高校三年生になった。四月最初のホームルームの時間に担任の石田幸一先生から発表があった。クラスに転校生が一名入ってくるという。しかもその転校生は女子ということで、とりわけ男子生徒たちは興味津々になった。しかし石田先生がその転校生は家庭の事情で実際にクラスに入るのは六月になると伝えると、高まった関心は一気に萎しおれてしまった。

2

二ヵ月がたち、六月一日になった。朝のホームルームの時間にその転校生は石田先生に伴われて教室に入ってきた。セミロングの髪を二つに分けて首を包むように鎖骨までおろし、制服である白いブラウスと濃紺のボックスプリーツスカートを身に付けた中肉中背の生徒であった。顔を上げ胸を張ってのびやかに立っていて、しっかりとした存在感があった。石田先生が黒板に転校生の名前を書くときクラス一同はアッと驚いた。読み方が分からなかったからだ。続いて石田先生は転校生に自己紹介をするよう促した。どんな声で話すのかクラス中の生徒が固唾かたずを呑んで聴き耳を立てた。

「熊埜御堂萌香くまのみどうもえかです。イエメンから転校してきました。どうぞよろしくお願ひします」

緊張のためか、やや小声だったが、とても澄んだ声であった。転校生はそれ以上のことを語らなかったの、石田先生も間を持って余して少し当惑さみであった。

「それでは、当面は学校の様子をその都度いろいろ教えてあげてください」

そう言って石田先生はホームルームを切り上げ、教室を出て行った。

すぐに女子生徒数名が転校生のところに行き、気さくに話しかけ世話を焼き始めた。しかし男子生徒たちは由緒ありげな名前とイエメンから来たという事実に何か近寄りたいたいものを感じて、遠巻きに見ているだけであった。

六時間目が終わったとき、川浪は前の席に座る安居政茂やすいまさしげから話しかけられた。

「川浪、熊埜御堂って結構いいじゃん。俺、気に入っちゃったよ。お近づきになりたいな」

安居のことばを聞いて川浪は不安を覚え、思わず警告のことばを吐いていた。

「強引なことはするなよ。ちゃんと順序を踏めよ」

2019年9月30日受理

川浪は安居とは一年次から同級生なので、彼には困った性癖があることを知っていたからである。安居は自分の好みの女子は、その女子の方でも安居に気があると思ひ込み、その女子が嫌がる面倒な事態を引き起こしてしまうのだ。

3

六月は二学期に開催される文化祭、体育祭の助走期間である。川浪の高校では十月の体育祭が全員参加ということもあり、高校生活最大のイベントになっている。中でもクラス対抗リレーは各組が三学年まとまって競い合う体育祭のフィナーレを飾る種目で、最も盛り上がる競技なのだ。各クラス男子二名、女子二名が選手になる。

その選手選びは六月中旬に行うが、三年生は誰が速いか分かっているので、選考はすぐに終わる。しかし今年は女子に変化があった。女子五十メートル走で熊埜御堂がクラスで二番目に速かったのだ。それで女子は宮田順子、熊埜御堂萌香、男子は大場宗平、川浪博がリレーの正選手に選ばれ、予備選手には武藤和子、中村徹が選ばれた。大場宗平、宮田順子は陸上部員でもある。川浪のクラスは今年こそどうしても勝ちたいと思い、七月の期末試験前までに三年生だけでもバトンパスの練習を行うことにした。

六月第三週の金曜日放課後に六人はグラウンドに集まった。まず円滑なバトンパスができるよう六人が男女のペアとなり練習をした。

次にペアの組み合わせを変えて練習することになり、川浪は熊埜御堂とペアになった。事故が起きたのはそのときであった。バトンを渡すため川浪は速力を上げて熊埜御堂に接近していた。熊埜御堂は走り出したが、その速力が十分出ないうちに、勢いこんで走って来た川浪に突き当たられてつんのめり、足をもつれさせて地面に激しく体を打ちつけた。川浪も勢い余ってその上に覆いかぶさるように倒れこんでしまった。

「あ、あッー、ご、ごめん、大丈夫？」と川浪はあわてて声をかけた。

熊埜御堂はそれには応えず目をつむって歯を食いしばっていた。宮田順子が駆け寄り、心配そうに尋ねた。

「足首ひねったんじゃない？一人で立てるかな？…保健室で診てもらおうか？」

そう言われて熊埜御堂はふらつきながら立ち上がり、足を一步踏みだしたが、「ウッ」と声を漏らすと顔をしかめて倒れるようにしゃがみこんでしまった。それを見て川浪はとっさにことばを吐いた。

「熊埜御堂さん、俺の背中に乗って。保健室まで負ぶって行くから」

熊埜御堂はためらっていたが、歩けそうもないのでそのことばに従い、負ぶうためにしゃがんでいる川浪の背中に体を預けた。川浪は熊埜御堂の上体を背中で受け止め、左右に開いた彼女の太ももをしっかりと左右の腕で抱えこんで、約四十メートル先の保健室に向かって急ぎ足で歩きだした。一步踏み進むごとに熊埜御堂の体が川浪の背中の上で上下に弾んだ。宮田順子も不安な面持ちで一緒について来た。

保健室に着くと養護教諭の古田日向子^{ひなこ}先生が熊埜御堂の足首をていねいに調べてくれた。

「これは捻挫だね。校医の牛山外科で診てもらいましょう。今電話しておくわね。宮田さん、熊埜御堂さんの私物を牛山外科まで持ってきてね」

そう言うとき車通勤の古田先生は川浪に熊埜御堂を教職員用駐車場に連れて行くように指示した。川浪は熊埜御堂を再び背負うように言われたと思い、負ぶう態勢をとって、熊埜御堂に再度声をかけた。

「早くしないといけないから、また負ぶって行くね。じゃ、乗って」

しかし今度は転倒直後とは違い、熊埜御堂も川浪も負ぶうことは互いの体を密着させることだと強く意識した。十八歳の男女がぴったりと体を重ね合わせるなど普通はありえないと気付いたのだ。だが今は恥ずかしさでためらっている場合でないことも分かっていた。それ故なのか熊埜御堂は今度も川浪のことに従い体を川浪の背中に預けた。実は、保健室には負傷者運搬用の手押し式車椅子があったのだが、そのことを生徒の誰もが忘れていた。

4

二時間後、治療を終えた熊埜御堂は自宅の最寄り駅の階段を足首を固定するギプスをつけ、松葉杖をついて慎重に一段一段降りていた。川浪も熊埜御堂の鞆と自分の鞆を持ち、付き添っていた。川浪は牛山外科の玄関口で熊埜御堂を待ち、治療を終えて出てきた熊埜御堂に「家まで送っていく」と申し出て、それに古田先生も賛成し、こうなっているのであった。

「熊埜御堂さん、本当にごめん。家に着いたら、俺、家の人にも謝りたい」

「謝るなんて、いいわよ。私も悪いんだから。家はここから十五分だから、もう大丈夫よ。川浪君はここでいいわよ。ありがとう。明日からの通学の練習もかねて、自分で鞆を持って歩いてみるわ」

そう言われても川浪は送ると言い張り、二人の鞆を両手に持って、熊埜御堂の家まで送って行った。家に着くと、川浪は玄関に居て、応接に出た母親に事の次第を説明し、頭を下げて謝った。母親は娘を送ってくれた川浪の労をねぎらい礼を丁重に述べ、消沈しきっている川浪を励まそうとして「あがってジュースでも飲んでいってください」と勧めてくれた。しかし川浪は辞退して帰路についた。

5

翌朝、川浪は熊埜御堂の家の門前で自転車に乗って待っていた。熊埜御堂には何も伝えずに独断でしたことだった。七時に熊埜御堂が玄関を開けて松葉杖で体を支えながら、鞆を右手に持って出てきた。熊埜御堂が門を出たところで川浪は自転車から降りて声をかけた。

「おはよう。俺、来ちゃったよ。家を五時半に出たんだ。鞆をこっちによこして、前の籠に載せるから。熊埜御堂さんは後ろの荷台に横座りで乗ってくれる。松葉杖は膝の上に乗せるか脇に抱えるといいよね。大丈夫、心配しないで、二人乗りはしないから。俺が自転車を押して行くから」

「ありがとう。でも自転車を押して学校に行ったら、二時間以上かかるんじゃない？」

「駅まで自転車で送るから、学校の駅までは電車で行ってよ。俺、向こうの改札口で待つて

る。で、そこからまた熊埜御堂さんを自転車に乗せて学校まで押して行こうって思ってた。荷物は自転車でこのまま俺が運んどくから」

「分かったわ。じゃ、そうさせて」

熊埜御堂は鞆を川浪に渡し、自転車を支える川浪の肩につかまりながらクッションを括りつけた荷台になんとか横座りで乗った。

実を言えば熊埜御堂が左手を川浪の右肩に置いて体重をかけたとき、川浪は自分の背中が昨日憶えてしまった熊埜御堂の体の男の体とはまるで異なる感触を思いだしていた。その記憶は女子についての思春期男子特有の様々な妄想を川浪の心の中に呼び起こした。しかし昨日の突発的な事故をきっかけに川浪は熊埜御堂を大切な人と思い始めていたので、熊埜御堂をその種の不純な妄想の対象にすることは避けたかった。それ故川浪はその妄想を躍起になって振り払おうとしたが、そうしている間にも、その低俗な心情を熊埜御堂にすべて悟られている気がしてとても恥ずかしくなった。

「川浪君、どうかしたの？ほんやりしちゃって」

そう言われて川浪は一瞬の淫靡な白昼夢から我に返った。

「い、いや別に。じゃ、行こう。ゆっくり押して行くから、バランスをうまくとってね」

二人の通学姿は熊埜御堂が松葉杖を抱えているので、怪我をした女子高生をサポートする男子高校生という図柄で捉えられ、幸い通行人の好奇の目を特には惹かず済んでいた。

川浪は何か話題を提供しなくてはと思い、話しかけた。

「俺のせいで転校三週間目でこんなことになっちゃってごめんね。調子狂わせちゃったよね」

「でも、みんなが親切にしてくれて助かったわ。痛かったけど、リレーのメンバーとも仲良くなれたし。川浪君って、女の子にいつもこんなに優しいの？」

「別に女にだけじゃないよ。今回は俺の不注意で熊埜御堂さんにケガさせたから。俺、男にだってケガさせたら、同じことをするよ」

川浪は女にだけ親切にする下心ある男と言われた気がしてやや気分を害し、ぶっきらぼうにことばを返した。熊埜御堂も川浪の心の動きに気が付いて言い繕うとしたが、その前に川浪がことばをかけてきた。

「熊埜御堂さんの苗字ってすごいよね。みんな読めなかったよ。先祖は神社の宮司なの？」

「いつもそう言われるけど、私の知る限りでは、親戚に神社関係者はいないわ。なんでも九州の大分県に多い苗字と聞いてはいるんだけど」

「へー、そうなんだ。自己紹介を聞いたとき、なんか由緒がありそうで、みんな怖気づいたよ。名前の『萌香』の方も面白い由来がありそうだね」

「名前はね、父がつけてくれたの。父は商社に勤めてて、コーヒー豆の輸入一筋二十年という仕事の鬼なのね。だから私が生まれる前も後もエチオピアとかイエメンに行っていて、ほとんど日本にいたことがないの。私の名前も最初は『萌える香り』って書いて『モカ』って読ませるつもりだったんですって。それを母がせめて日本人らしい読みにしてと言いつつ『モエカ』

にしてくれたの」

「そうかー、コーヒーのモカが由来なんだ。でも漢字で書いてモエカと読ませると、品格のある日本人らしい名前になってると思う」

二人は互いの名前の由来や趣味のことなどを紹介しあって駅に着き、出掛けに打ち合わせた手順を踏んでその日の登校を果たした。

6

教室に入ると、バトンパスの練習のときに起きた事故のことは既にクラス中に知られていた。熊埜御堂は女子生徒にいろいろとケガの状況を訊かれて、それぞれに簡潔に答えていた。そうするうちに一時間目の古文の授業となった。担当の木村省吾先生は万葉集にある大伴旅人おおともたびとの歌を取り上げていて、その淡々とした説明は今朝早起きをしてきた川浪をはじめクラスの半数の生徒の眠気を誘っていた。そのときパシャと小さな音がした。その音を聞いた者は数名いたが、その一人の佐川義人はその音がスマホ搭載カメラのシャッター音だと瞬時に理解した。しかしその場で騒ぎ立てることはせず、誰がその音の主であるか見究めようとしていた。

木村先生が質問を投げかけた。

「大伴旅人の家族関係と官職について説明できる人はいるかな……熊埜御堂さん、どうですか。あッ、怪我してるんだね。立たないで座ったままでいいですよ」

指名されて熊埜御堂は「はい」と返事をして、質問の答えをすらすらと述べ始めた。

「大伴旅人は万葉集の編者と言われる大伴家持の父親で九州の太宰府の長官である『大宰帥』だざいのそつをしていました。山上憶良やまのうえのおくらとも親交がありました」

その答えを聞いて木村先生は満足そうに目を細め、熊埜御堂を見ながら補足した。

「うーん、よく勉強していますね。少し付け加えるならば、旅人の異母妹に大伴坂上郎女おおとものさかのうえのいらつめという万葉時代を代表する女流歌人がいることですね。あなたは多分知ってたんじゃないかな」

「親類とは思ったのですが、妹とは知りませんでした」

熊埜御堂が話している最中にまたパシャとかすかな機械音がした。その音の主を突き止めようと辺りに目を配っていた佐川義人は、不審な挙動から音源は安居政茂であると確信した。授業が終わり休み時間になると、佐川はすぐさま安居の席に行き、ドスを効かせた野太い声で話しかけた。

「安居、おまえ、授業中何やってたんだよ。出せよ、そのスマホのカメラ」

佐川に詰問されて安居は狼狽し縮み上がったが、それでも必死に言い逃れようとした。

「カッ、カメラなんて持ってない。言いがかりはよしてくれ」

安居がビクついている様子を見て、佐川はクラスの人々に聞こえるように大声で言った。

「おー、じゃ、出して見せてもらおうか、そのカメラ。出せや、疚やましくなければ見せろや」

そう言う佐川は返事も待たずに安居を席から引きずり出し、机の中に隠されていたスマホを取り出した。そして手慣れた様子で操作して画像の一覧を出した。すぐに「おひえーッ」とわざとらしい悲鳴をあげ、それから大音声で画像の内容を暴き立てた。

「熊埜御堂の画像ばっかしじゃねえか。何枚撮ったんだ？二十枚じゃきかねえよな、安居。いつどうやって撮ったんだ。ヤバイ盗撮なんかしてねえだろうな。スカートの中なんて撮ってねえだろうな」

佐川は安居がそこまで卑劣な生徒でないことは分かっていたが、盗撮と大声で叫ぶことでクラスの皆に安居に対して強い疑惑を抱かせることを目論んでいた。そしてその目論見は見事に成功した。女子生徒たちは撮られたのは卑猥な画像ばかりだと憶測して、みな顔をしかめ、安居に軽蔑の視線を向けた。

一応友人ではあるので、川浪は安居の窮地を救おうと割って入った。

「佐川、返してやれよ、スマホ。安居はゲスな写真なんか撮ってないから」

「かばうなよ、川浪。安居は熊埜御堂の写真ばかり隠れて撮ってたんだぞ。ここにはいだけでヤバイのだって隠してるかもしれない」

当事者の熊埜御堂は足が不自由なので席を離れることもできず、黙ってただ下を向いていた。川浪は佐川が勢いついて安居を更に責め立てる気配を感じたので、事態の收拾を急がねばならないと焦った。何をどうすればよいのか分からなかったが、とりあえず安居に謝罪をさせることにした。

「安居、こっち来いよ。熊埜御堂さんに謝れ。そして画像を熊埜御堂さんの見てる前で全部消去しろよ」

川浪に言われて観念したのか、安居はスマホを持って熊埜御堂の席に行き、かしまって本人の前に立った。そしてスマホを熊埜御堂に差し出した。

熊埜御堂はスマホを受け取ると、そのカメラに残る二十枚以上の画像をすべて点検した。すると安居がうなだれて口を開いた。

「くッ、熊埜御堂さん、ご、ごめん。写真、いま…全部…け、消す」

安居はかぼそい声でとぎれとぎれにことばを繰り出した。震えているようにも見えた。その様子を佐川は愉快そうにニタニタ笑って見ていた。しかし熊埜御堂の次の返事を聞いて、佐川はもちろんクラスの皆も驚いたが、安居本人の驚きが一番大きかった。

「安居君、謝ってくれてありがとう。でも、画像はどれも消す必要はないわ。事後的にだけど、これまでの撮影は今ここで私が許可します。でも、これからは撮らないで」

7

川浪は熊埜御堂の自宅の最寄り駅で待っていた。熊埜御堂が改札口を出てくると足元に気を配りながら駅の階段と一緒に並んで降りた。そして階段の下の道路端に停めておいた自転車まで来ると、その横に立ち、朝と同様に熊埜御堂に右肩を貸して荷台に乗れるようにした。熊埜御堂がちゃんと荷台に横座りしたことを確認すると、川浪は自転車を押して熊埜御堂の自宅へ向った。待ちかねたように川浪は今朝の休み時間に起きたことを話題にした。学校の最寄り駅までの道では他の生徒たちの耳もあり、この件は話せなかったからだ。

「今朝は本当にびっくりした。熊埜御堂さんは安居の謝罪を受け入れるだけじゃなくて、撮

影したことも、その画像を持つことも許可しちゃうんだから。クラスのみんなんも驚いてたよ」
 「だって謝罪を受け入れるだけなら、佐川君はまた安居君をいじめるじゃない。盗撮、盗撮っていつまでも言い続けるわ。だから撮影したことを許可して、画像もみんな持ってていいってことにすれば、撮影も画像も問題ないってことになり、佐川君が安居君をいじめる口実がなくなるって思ったの」

それを聞いて川浪は熊埜御堂が問題の本質を自分以上に的確に把握していたことに驚いた。熊埜御堂の言う通りなのだ。謝罪するだけでは安居は単に盗撮者として認定されるだけになってしまう。事後であれ撮影が許可され同時にすべての画像の所持も許可されてこそ、安居の行為は撮影された者から赦されるのだ。またこの場合たとえ一枚でも消去すれば、それは卑猥な画像を撮っていたと解釈され、そのことを責め立てる佐川のしつこいいじめから安居を救うことはできない。安居を救う道を瞬時に見出した熊埜御堂の頭の回転の速さに川浪は改めて深い敬意を抱かざるを得なかった。

8

七月に入った。熊埜御堂の足首のギプスは受傷後十日目にはずされて、普通に通学できるようになっていた。二回の日曜日を除くそれまでの八日間、川浪は朝夕の登下校で熊埜御堂を自転車の荷台に乗せて送り迎えをした。そのおかげで二人の心理的距離はかなり縮まっていた。周囲の生徒もそのことに気が付いて、今では熊埜御堂が川浪に話しかけ川浪がそれに気軽に応じて、誰一人揶揄する者はいなかった。

これは文字通り怪我の功名であったが、捻挫の治療中に熊埜御堂にとって一つの不都合が生じていた。六月と七月の体育授業では水泳実技の指導があり、泳ぎの基本を身に付けたり、既に泳げる者は更に泳力を伸ばして水難救助法を学ぶのだ。そして九月第三週には水泳実技試験が実施され、生徒は全員が最低でも二十五メートルを一つの泳法で泳げることを証明しなければならない。しかし熊埜御堂は捻挫の治療期間中すべての体育授業を見学せざるを得ず、泳ぎ方の基本を実地で学ぶことができなかった。泳げない熊埜御堂はそのことが残念でならなかった。

9

七月二十日に終業式があり、夏休みが始まった。夏休み七日目のその日、川浪は所属する剣道部の練習のため登校し、熊埜御堂は美術の大岡先生から美大受験に必要なデッサンの指導を受けるため学校に来ていた。夕方になり二人はその日の予定を消化したので下校しようと校舎入口にある下駄箱にそれぞれでおもむいた。期せずして二人はそこで出会うことになった。

熊埜御堂は来合わせたのを幸いに、気に病んでいる水泳実技の件を川浪に相談しようと決めて話しかけた。

「川浪君、九月に水泳実技の試験があるじゃない。でも、わたし泳げないの。水泳の授業は全部見学しちゃったし…だから泳ぎ方教えてくれない。試験までに泳げるようになりたいから」

「教えるって、どこで？海水浴かなんかの場所？」

「いきなり海は怖いわ。だから遊園地のプールみたいなところを考_えてるの。だって、本当のプールは泳げる人ばかりで私みたいな人は邪魔になるし、私も恥ずかしいわ。泳げない人も来る遊園地のプールがいいと思うの」

「教えるのはかまわないけど、プールって水着になるんだよ」

「当たり前じゃない、何言ってるの…あッ、わかった、川浪君、もしかしていやらしいこと考_えてるんじゃない？」

「そんなことないよ。なんだよ、いやらしいことって」

「わーッ、赤くなってる。やっぱりいやらしいこと考_えてたんだ」

川浪はあの事故の日_に熊埜御堂を負_って以来、女子の体について意識過剰になっていた。今も水着ということばを口に_しただけで、熊埜御堂に対する憧れと欲望の入り混じった妄想が心の中_にうごめいてしまうのだ。川浪はその低俗な心情を自分の頭から振り払おうと必死になっていた。だから余計むきになって言い返した。

「いやらしいことなんか考_えてないよ、だって、泳ぎを教えるって、水の中で手を引っぱったり、足をつかんだり、体を支えたりして、いろんなところ触ったりすんだよ。嫌でしょ、女子はそんなの。俺、それを心配してたんだ」

「水の中で命を守る方法を身に付けるんだから、そのくらいなんでもないわ。気にしないから、教えて」

そう言われて川浪はこの話は熊埜御堂とより親密になる絶好の機会になるかもしれないと思った。それも熊埜御堂から懇望される形なので、水泳指導を実行しても周りにいる人間に申し開きができるような気になった。川浪は自分が注目を集める女子と一緒に行動する場合、何かしら大儀名分が必要という気がしてしまうのだ。これまでの行動は熊埜御堂を捻挫させたお詫びの意味で熊埜御堂を支援していると解釈されて、クラスメイトから非難されずに済んでいると思っていた。そういう流れがあるので今回の水泳指導もお詫びの一環と位置付ければクラスのみんなから許されるだろうと勝手に解釈した。

「分かった。それじゃ遊園地のプールなら、豊島園の『流れるプール』がいいかもしれない。大人も子供も来るからね。思い立ったが吉日、よかったら明日から始める？」

「うん、いいわ。明日から願_いするわ。じゃ、待ち合わせ場所は池袋の西武線改札口にお昼の十二時半でいいかしら。時間を無駄にしないようにお昼ご飯は済ませてきましょ」

「了解。俺、切符を買って待ってるよ」

10

翌日、熊埜御堂は定刻に待ち合わせ場所に現れた。その姿を目にした途端、川浪は度肝を抜かれた。熊埜御堂はハードロックカフェのロゴ入り白Tシャツに膝上十センチのラメ入り黒ミニスカートを_はき、網タイツで現れたのだ。網の目は一センチ四方ほどで、ほどよく肉が付いて引き締まった白い^{あし}脚が太ももまでよく見えた。

「お待たせしました。でも、ちゃんと定刻でしょ」

熊埜御堂は晴れやかに微笑んで川浪に呼びかけた。

川浪はそのいでたちが余りに煽情的に思えて気圧^{けお}されてしまい、すぐには返事ができないでいた。煽られた自分の方が恥ずかしくなってしまったのだ。

「川浪君、なに見てるの。私、どこかおかしい」

「い、いや、おかしくないよ、どこも。学校の制服着てるときと印象がまったく違うんで、ことばがでなかったんだ。でもすごくかっこいい。熊埜御堂さんが着ると、ラメ入りミニスカも網タイツも全然不良っぽくないよ」

印象が驚愕から讃嘆へと変化していた。というのも、ほかの者が身に付ければどぎつく派手派手くなるアイテムでも、熊埜御堂が身に付けると、身体全体からさっぱりとした清々しい雰囲気醸し出されているように感じられるからだ。

二人は西武池袋線に乗り豊島園駅で降り、一分ほど歩いて豊島園に着いた。そして「流れるプール」の入場券を買い、男女別の更衣室に急いだ。

川浪は学校指定の校章入り水泳パンツをはき、熊埜御堂も学校指定の濃紺のワンピース型スクール水着を着て、頭には校章入りキャップをかぶり髪をまとめていた。体を水温に慣らすため二人は順番にシャワーを浴びて、プールサイドに出た。

「流れるプール」は一周三百五十メートル、幅八メートルのドーナツ型で、深さは一・二メートル、そこに人を一定の方向に動かすために緩やかに水が流れているのだ。

二人はプール端^{はた}で手首足首を回し、前屈、後屈を数回繰り返して軽い準備体操をした。それが終わると、熊埜御堂は少し不安を含んだ視線で川浪の顔を見た。そして意を決してプールの縁に手をかけ、恐る恐る足から水に入れていき、なんとか胸元まで水につかった。川浪はそれを見ると足からジャボンと水に飛び込んだ。

「それじゃ、始めるよ。まずプールの縁に両手でつかまって顔を水につける。水に沈めるんだよ。息が苦しくなったら、顔を上げて息を継ぐ。これを二十回やろう」

「分かったわ。じゃ、顔を水につけるわよ。見ててね」

熊埜御堂は川浪の指示通りに顔を水につける練習から始めた。水の中に顔を沈めてブクブクと息を吐き、息が尽きると顔を出して息を吸い込むだけの単純な練習である。しかし高三女子がする練習としては、それなりの決断を要するものであった。というのも、息を吸うときに波立った水を呑みこんでしまうと、むせてせき込むこともあり、その顔は苦しさで醜くゆがみ、口から水を吐き出したり、鼻孔から水を流したりして、とても異性に晒せるものではないからだ。その無様な顔を晒すことも厭わずここに来ている無防備な熊埜御堂を川浪はとても愛おしく思った。ちゃんと泳げるようにしてあげなければいけないと改めて気持ちを引き締めた。

その練習が一通り終わると次の練習メニューの、両手でプールの縁につかまってバタ足を打つ訓練に移った。それを十五分ほどで終え、今度はバタ足をしながら息継ぎをする練習を三十本した。そして更に難しい練習に移っていった。

「じゃ、今度は両手首を俺がつかんでるから、体を浮かせてバタ足だけで前進するんだ。足の甲を魚の尾ひれと思って水を打つ、人魚姫みたいにね、いいね」

「分かったわ、ちゃんと手をつないで。離しちゃいやよ。じゃ、両手をつないでちょうだい」
熊埜御堂は川浪に両手首をつかまれて顔を水につけ、左足、右足と片足ずつこわごととプールの底を蹴った。体がふわっと水に浮かぶとバシャバシャと足で闇雲に水を打ち、息を二回継いだところで足を底につけて立った。「ハー、ッハー、プハー」と荒く息を吐き、両手で顔の水を何度も拭いながら声を弾ませて言った。

「私泳いでた？ね、ね、泳いでたでしょ。いい感じで進んでみたい。これでいいでしょ？」
川浪から見ると実質一・五メートルしか進んでいないその泳ぎはいい感じではまったくなかった。それで改善すべき点を述べた。

「バタ足をするとき、膝を曲げちゃいけないんだ。さっきやったよね。思い出して。バタ足は太ももを上下に動かして脚全体あしで水を打つんだ。膝を曲げると膝下の脛ひざした すねだけで水を打つことになるね。それだと推進力つかないんだ。俺がやってみせるよ。まず熊埜御堂さんのバタ足を真似するね。次に正しいバタ足をやるから、よく見てて」

やってみせると熊埜御堂はバタ足の正しい打ち方を頭では理解したようだった。その後熊埜御堂は何度も練習をして手をつなぐ補助があれば体を浮かせてバタ足で一定の距離を進み、息継ぎもできるようになった。

その日、川浪は水の中で熊埜御堂の手首を持って支えることこそしたが、熊埜御堂が溺れるのを怖がって川浪にしがみつこうとした場面でも、その動きを巧みにかわして、しがみつかせなかった。また自分からも熊埜御堂の体に触れることは一切しなかった。しかし熊埜御堂の体に触れないようにいちいち意識していた自分に気が付いて、結局それも異性の体を過剰に意識していることの反動にすぎないのだと悟った。

熊埜御堂の方は川浪がもっと粗雑な指導をすると予想していた。怖がらせるためにわざと手を離して、自分が川浪にしがみつかざるを得ないように仕向けることもあると思っていた。しかしそのようなことは起こらず、きちんと体系だった指導がなされ、自分が水の中でできることが増えたと実感した。川浪に対する信頼感と親しみが増し、充実した時間を一緒に過ごせたと感じてとても嬉しかった。

二人が豊島園のプールに来てから三時間半が経過していた。川浪はこれであがろうと声をかけた。

「熊埜御堂さん、筋がいいよ。水に浮いてけっこう進むようになったじゃない。あと一回練習すれば、バタ足だけでなんとか二十五メートルは泳げると思う。それで実技試験は合格だね。じゃ、今日はこれであがりましょう。俺、着替えて出口のところで待ってるね」

11

熊埜御堂は出口で待っていた川浪に合流すると、よく響く明るい声で言った。

「川浪君、今日帰りに西武デパートに寄って行かない？私、スクール水着じゃ嫌なの。自分

にあった水着を着たいから、一つ買おうかなって思うの。ねー、いいでしょ、一緒に来て」

川浪は三時間以上も泳ぎの練習をした後なので、二人で少し休んでから帰宅するつもりでいた。だから熊埜御堂が疲れた様子も見せずにデパートに寄ろうと提案したことに驚いていた。そして行くのはかまわないけれど、女子の水着売り場に同行するのは、とても自分にはできないと思った。

「えッ、疲れてないの、元気あるなー。じゃ、デパートまでは一緒に行くけど、水着売り場には一人で行ってよ。俺、女子の水着なんて分からないから」

「分かるとか分からないなんて関係ないんじゃない？だって川浪君は好きか嫌いか言ってくれるだけでいいんだもん。川浪君、女の子はねー、男の子の好きな恰好をしてみたいときがあるの。媚びてるんじゃないわ。自分の女の子の部分をも男の子にいいって言ってもらえるのが嬉しいのよ」

熊埜御堂は泳ぎの面で進歩した実感を味わったからか、高揚した様子で川浪に女子の心理を解き明かそうとした。その熱のこもった口調と眼差しに接して、川浪は水着売り場への同行を断り切れなくなった。一緒にいる時間が長くなるのを喜ぶ気持ちも後押しをした。

「分かった。じゃ、一緒に行く。でも…すぐに決めてよ。水着売り場に長居は嫌だよ」

12

熊埜御堂に引き連れられて、川浪は西武デパートの女子水着売り場にやって来た。色とりどりの華やかな水着が所狭しと陳列されていて、それが川浪には女子の露わな体が並べられているように感じられ、なまめかしくて目のやり場に困った。

「いろいろあるわねー。色も柄もたくさんあるし、やっぱりかわいい水着が着たいわ。スクール水着じゃ着てても気持ちがりっと引き締まらないから楽しくないのよ」

熊埜御堂は川浪を従えて売り場を二十分ほどかけて一巡し、無地の真紅の水着を選んで手に持った。

「じゃ、これ試着してみるわ。川浪君、ちょっと待ってて」

そう言って熊埜御堂は売り場の裏手にある試着室に入った。売り場に残された川浪は店内に男一人で立っていることに大変な狼狽と苦痛を覚えていた。二三分が経過しただけであったが、もうこらえられないと思ったそのとき、熊埜御堂が自分の名前を呼ぶ声が聞こえた。

「川浪君、こっちに来てくれる」

売り場から試着室に入ると、ブースが四つ並んでいて、一つのブースのカーテンが閉まっていた。そのカーテンがパッと開けられて、熊埜御堂がセパレート型の水着を着て、胸を張ってのびやかに立っていた。トップスがしっかりと胸を覆っているが、腹部は大きく露出し、お臍も見えた。しかし下はショートパンツ型で、いかにもおしゃれな女子高生が選びそうな水着であった。

「これどうかしら、川浪君の意見を言ってくれる」

意見を求められても何を言うべきか、川浪には見当がつかなかった。とにかく何か言おうと

ことばを吐いた。

「よ、よく似合ってる、い、いい。いーと思うよ」

「んもーっ、考えもしないで『いい』なんて出まかせ言っ。もっと真剣に見て判断して。本当は全然気に入ってないんでしょ。じゃ、待ってて、売り場でもう一度選び直すから」

川浪はまだ一着目なのにもう心が疲れていた。長居はしたくないので、今度の水着は誉めまくって、それに決めてもらおうと算段した。川浪は売り場には戻らず、試着室の前で人目を避けて待っていた。すると熊埜御堂が白の無地の水着を持ってブースに入った。二分ほどして再びカーテンが開けられた。

「どうかしら、これ。とても素敵だと思うんだけど。川浪君もこういうの好きなんでしょ？」

熊埜御堂は胸を張り川浪をまっすぐに見つめて立っていた。それは純白のビキニであった。川浪はすぐにはことばが出なかった。熊埜御堂が鏡に映る自分の姿を確かめるため川浪から視線を逸らすのを見て、やっと返事のことばを口にした。

「熊埜御堂さん、そ、それ、いいんだけど…で、でも泳ぎの練習には、む、むいてないよ。や、やっぱりさっきの赤いので、い、いいんじゃない」

川浪にはビキニを身につけた熊埜御堂は眩しすぎて正視できなかった。只々^{ただだ}圧倒され狼狽しきってしまい、吃音ぎみにこれだけ言うのが精一杯であった。しかしそれでも一呼吸置いて気持ちを立て直し、視線をあちこちに泳がせながら水泳練習には赤い水着の方が構造的に安心であることを説明し、やっとのことで熊埜御堂を白のビキニから赤のセパレーツに翻意させた。館内は冷房が十分に効いていたが、川浪は全身がじっとりと汗ばんでいた。

川浪たちはようやくセパレーツの赤い水着を買って、西武デパートを後にした。入店してから五十分以上経っていた。次回の水泳練習は中二日をあげ七月三十一日に実施することにして、二人は別れた。

13

二人は前回と同様に西武線池袋駅の改札口で待ち合わせ、豊島園の「流れるプール」にやってきた。

「じゃ、俺、この前と同じところで待ってるから、早く来てね」

そう言って川浪は今日の練習メニューをもう一度頭の中で復唱した。前回の復習を三十分やり、その後は川浪の補助なしで熊埜御堂が体を水面と平行になるように浮かせてバタ足で前進し息継ぎもできるように訓練する、つまりバタ足泳ぎができるようになる、これを今日の到達目標と決めた。

「川浪くん、お待たせー」

と呼ばれて声の方を見た。その瞬間、川浪は息を呑んで絶句した。熊埜御堂がああ純白のビキニを着て立っていたのだ。

「驚いた？ごめんね。あの後、やっぱりこの水着が欲しくなってデパートに引き返し取り換えてもらったの。川浪君が心配してくれたこともちゃんと考えたわよ。この水着にはしっかり

したストラップがついてて、首の後ろで結ぶようになってるの。だから『構造的に安心』よ。ホルターネックビキニっていうの」

川浪は説得の際、ビキニで懸念される事態をはっきりとは言わなかったが、熊埜御堂は分かっていたのだ。川浪がビキニのトップスが外れてしまわないか心配していたことを。

それにしても川浪はやはり困惑し狼狽していた。周囲にいる同年輩の若い男たちはもちろん、子供連れで来ている父親たちでさえ、みんな熊埜御堂の水着姿に遠慮のない不純な視線を向けていたからだ。川浪は、しかし、彼らを断罪できなかった。自分も同罪だと分かっていた。

川浪は困惑しつつも練習メニューに従って泳ぎ方の指導を始めた。先日の復習を終えて、今日の主題である、川浪と手をつながずに両手を前に伸ばし両足を浮かせる練習に入った。すると熊埜御堂は依然として躊躇し怖がる様子を見せた。やむを得ず川浪は熊埜御堂の横に立ち、彼女の腹部の下に両腕をフォークリフトのように差し出して、その上に体を乗せるように促した。

熊埜御堂は指示の通りに川浪の両腕の上に体を乗せてきて、腹這いのまま横抱きにされる形で水面に体全体を浮かせた。予期せぬ成り行きからであったが、川浪は初めて熊埜御堂の肉体に直接手を触れることになった。触れてみるとその素肌はこの世のものとは思えないほど滑らかで柔らかく、川浪は今まさに異性の体に触れているのだと実感した。弾力に富んだ熊埜御堂の体の量感が両腕から直に伝わってきて、川浪はこれまでに経験したことのない心地よい昂りに全身を満たされて、自分が今どこで何をしているのか忘れてしまった。

そんな川浪の気持ちには気付かずに、熊埜御堂はこの形で十分ほど練習をした。するとコツがつかめてきたのか、川浪の腕の支え無しで泳ぐと言った。そして自分で行けるところまでバタ足で進み息を継ぐ練習をした。水を飲みこみ何度もむせたりしたが、一時間ほど訓練して、どうにか一人でバタ足泳ぎができるようになった。熊埜御堂は喜びに溢れる弾んだ声で川浪に言った。

「ありがとう、私、バタ足で前に進んで泳げるようになったわ。すごく嬉しい、最高の気分よ。本当にありがとう。これまでずっと泳げないことに劣等感をもってたの」

熊埜御堂の心からの感謝のことばに対し川浪はただ頷くだけで応じた。というのは練習中に熊埜御堂の体に触れて思わず官能的陶醉に浸ってしまった後ろめたさで何も言えなくなってしまっていたからだ。

「川浪君、なんか今日は優しくないのね。一度も笑わないんだもの。怒ってるの？水着のこと」

「怒ってないよ。熊埜御堂さんの水着姿、正直言ってすごく恰好いい。でも、でもって言うか、だからって言うか、俺その横にいて、周りの人に非難されてる気がしちゃうんだ。お前がその恰好いいビキニの女にふさわしいって思ってるのか、って」

熊埜御堂は川浪が自分の水着姿を褒めてくれたのがとても嬉しかった。またそのビキニを着た自分に川浪自身がふさわしいかどうか自問している謙虚さにも好感を持った。ふさわしくな

いのではないかと不安に思い、周囲の目を気にしている川浪を励ましてあげたいと心から思った。

「川浪君のおかげよ。もう水が怖くない。水泳実技試験も多分合格するわ。川浪君って、教え方が最高に上手なのね」

川浪は自分の不純な内面を思うと、褒められるのがとても面映ゆかった。しかし熊埜御堂が泳ぐことになんとか自信を持てるようになったので、今日の練習を打ち切ることにした。

「じゃ、今日はここまでにして帰ろうか。俺、また出口のところで待ってるね」

14

夏休みも残すところ十日余りとなった。泳ぎの練習以降、川浪と熊埜御堂は七回学校に行き、それぞれの予定をこなした後、示し合わせて一緒に下校していた。その七回目の下校の際に川浪は熊埜御堂が抱える複雑な家庭の問題を聞くことになった。

捻挫した熊埜御堂を自宅まで送った際に川浪が面会した母親は彼女の実母ではなく、彼女が八歳のときに父親が再婚した人で、義理の母だという。とても良い人で父との間に生まれた妹と実子でない彼女をなんの分け隔てもなく育ててくれた。問題は熊埜御堂が五歳のときに、夫と娘を置いて、他の男のもとに走った実母のことだった。父は当然その実母を離縁し、以来一切の交流もなく今日に至っていたが、幼稚園で母親同士の付き合いのあった人が、半年前にある病院に行った折、偶然その実母に会い、今日までの消息を知ったという。家庭を捨ててまで情を交わしたその男とは二年で別れ、それ以後は生活のために勤めた水商売の店で知り合った自称実業家や和食料理屋の調理人と同棲したりしたが、長く続くことはなかった。そんな無軌道な生活のせいか、健康を顧みる暇も金銭の余裕もない中で徐々に体調を崩していった。その不調が耐えがなくなり、昨年末にようやく精密検査を受けた結果、ステージⅣの子宮癌が発見されたのだ。実母と知り合いであったその人は熊埜御堂萌香宛ての手紙で実母の様子を知らせてくれたのだった。四日前に届いたその手紙によると検査の時点で余命は半年であり、すぐに福祉事務所での手続きを経て入院となった。熊埜御堂はまだ見舞いに行っていないが、既に緩和ケア病棟に移された実母の余命は長くてもあと十日ほどという。

15

川浪と熊埜御堂は下校の折、学校近くの公園に寄り、木陰になったベンチに座り話していた。

「川浪君、私、お見舞いに行くべきかしら……行くとして、父や今の母に言うべきかしら」

川浪はこの重い問いかけにどう答えたらよいのか見当がつかなかった。しかし熊埜御堂が父や今の母に言うべきかという点を主に迷っているらしいので、見舞いに行くことはもう決めたのだと判断した。

「熊埜御堂さんはお母さんのことよく憶えているよね。五歳まで一緒だったんだし。この機会に会わなかったら、きっと後悔するよ。いろんなことがあって気持ちは複雑だろうけど、行った方がいいと思う」

「父や今の母にはどうしたらいいの？行く前に言ったら、父は私を行かせないと思う」

「お父さんは熊埜御堂さんのお母さんを赦せないだろうけど、娘が実の母に会うのを禁止する権利はないと思う。この世でたった一人の母親、それも死にかけてる母親に会うのを禁止するなんてしちゃいけないことだよ」

「父は母に裏切られた人なの。父は残された私のことも含めてすごく苦しんだと思う。だから私が母に会うと言ったら、父は私にまで裏切られたと感じるんじゃないかしら」

川浪は何も言わずに実母に会いに行くのもありじゃない、と言おうとしたが、それも裏切りという点では同じだと気が付いた。つまり、言っても言わなくても裏切りになってしまうのだ。

しかしこっそり再会して波風を立てないことが最善と割り切る姑息な知恵は正義感の強い熊埜御堂も川浪も持ち合わせていなかった。

「ご両親を怒らせちゃうだろうけど、俺、熊埜御堂さんと一緒に二人に頼みに行ってもいいよ」

「じゃ、もう時間がないから、今日父に話してみる」

熊埜御堂は悲壮な決意を込めて言った。

「玄関の外で待ってる」

川浪は熊埜御堂の目を見て声に力を込めて言った。何か起こると予感したのだ。

16

その日の夕刻、熊埜御堂は玄関の外で待つはずだった川浪を応接室で父親に紹介した。そして川浪と並んでソファに座りテーブルを挟んで父親と義理の母に対面し、静かに実母の件を話し始めた。しかし高校三年生の熊埜御堂と川浪には妻に裏切られた夫の苦衷を察することはやはり難しすぎた。

父親は話を聞くうちに、怒りでわなわなと震えだし、

「なんてことを言い出すんだ」

と言っていきなり立ち上がり、熊埜御堂の頬をひっぱたいた。

熊埜御堂はソファに倒れこみ、口が切れて唇に血をにじませた。打たれた頬に手を当てて肩を震わせている熊埜御堂の目からつうーと一筋涙が伝い落ちるのを見て、川浪は我知らず立ち上がって父親と向い合い、身震いしながら夢中でことばを言い放った。

「俺、い、いや、ほ、僕はこの場にはいけないと思いますが、心配で来てしまいました。萌香さんはお父さんに言ったら、自分までがお父さんを裏切ることになるんじゃないかって、すごく悩んでいたんです。で、俺、言わないで行ったら、そして後でそれが分かったら、もっとお父さんを裏切り深く傷つけることになるって言ったんです。それで萌香さんは今言ってるんです。俺が悪いんです」

「君に何が分かるんだ。他人の家のことに首を突っこまんでくれ」

熊埜御堂の父親は精一杯の分別をもって川浪を殴るのを自制し、荒々しくことばを吐いた。

「ほ、僕はお父さんの味わった苦しみや悲しみはほんの一部しか分かってないです。でも萌香さんの苦しみや哀しい気持ちはよく理解できます。お父さんだって、自分が萌香さんだった

ら、何日も生きないお母さんに会いに行きたいって思うんじゃないですか。もしかしたら、会える最後の機会かもしれないって…」

川浪は最後のところで胸が詰まって、ことばを言い切れなかった。肩を震わせて懸命に嗚咽をこらえる熊埜御堂の横顔が目に入ったからだ。

そのとき熊埜御堂の義理の母が初めて口を開いた。

「あなた、川浪君の言うことももっともなことよ。私はあなたの妻です。夫であるあなたの苦しみ、悲しみ、悩み、屈辱感、みんな分かっているつもりです。でも、今のあなたは自分の感情にとられすぎて、萌香の気持ちが変わらなくなっていますか。私も血の繋がりはないとはいえ、母として萌香を一生懸命育ててきました。だから、だからこそ大切な萌香の今のこの願いを叶えてあげたいんです」

義理の母の声も最後は涙まじりになっていた。一呼吸入れて彼女は言い足した。

「川浪君、萌香の話をお聴いて、一緒にいろいろ考えてくださって本当にありがとうございます。萌香にこういうお友達がいて本当に良かった、安心したわ」

妻の分別あることばを聞いて幾分か心を鎮められた熊埜御堂の父親は息を一つ深く吸ってから、次のことばを川浪に伝えた。

「川浪君、この問題は親子、夫婦でよく話し合う。今日はこれで家族だけにしてくれないか。さっきは年甲斐もなく萌香に手を上げてしまったが、もうそんなことはしない、心配はいらないから」

17

両親と話し合った翌々日、熊埜御堂は都内にある病院の緩和ケア病棟の一室で実母と向かい合っていた。十三年ぶりの再会であった。実母の様子を知らせてくれた知人に前日に連絡を取り、急遽その日に面会する段取りとなったのだ。

成長した娘の萌香を見て、ベッドに横たわる実母は神の前で裁きを受ける罪人のようにかしこまり、同時に、既に死を覚悟した者の落ち着きをもって話しかけた。

「育児や婚家での人間関係でいろいろ悩んでいてね、このままじゃ娘を道連れに母子心中してしまうところまで追いつめられていたの。お父さんはコーヒーの件でほとんど日本にはいないし、近くにも相談する人がいなくてね。精も根も尽き果てていよいよ母子心中しようと決意して幼稚園から帰って来たあなたを抱き締めたら、あなたが私を見て微笑んだの。それで我に返って思いとどまり数日呆然としていた。そんなとき声をかけてくれた人がいて、娘を死なせるよりは置いて家を出て、その人と暮らす方を選んでしまったの。手前勝手に赦される話じゃないけど…」

熊埜御堂は実母が自分を死の道連れにしないために、男と家を出たという話になんの憤りいきどおも恨みも覚えなかった。近くに話を聴いてくれる人がいることが、どんなに心を励まし、困難を乗り越えさせてくれるのかが分かっていたからだ。そのような人がいないのが当時の実母だったのだ。実母も彼女なりにその境遇の中で精一杯生きたのだと思った。その思いを熊埜御堂は実

母に伝えた。

この面会の二日後、熊埜御堂の実母は息を引き取った。

18

八月三十一日、熊埜御堂はデッサンの練習をするために登校し、川浪は剣道の練習のため学校に来ていた。下校時間になり、示し合わせたわけではなかったが、二人は玄関口にある下駄箱のところで来合わせた。互いの顔と姿を見ると、二人とも嬉しさが胸に満ち溢れ、心が浮き立つのを抑えることができなかった。

熊埜御堂がよく通る澄んだ声で話しかけた。

「川浪君、この夏は泳ぎ方を教えてくれたり、母のことでいろいろ相談に乗ってくれて、ありがとう。悲しいこともあったけど、私、一人じゃないのね。それが分かってとっても嬉しい」
言いながら熊埜御堂は可憐な瞳に力を込めて川浪をしっかりと見つめた。川浪がそのことばに応えようと口を開きかけたとき、熊埜御堂は一度まばたきをすると早口で言い足した。

「川浪君が好きっ」

言い終えるや否や、熊埜御堂はくるっと体の向きを変え、校舎の玄関口を一目散に走り出て行った。

川浪は一瞬呆気にとられていたが、すぐさま我に返ると、

「熊埜御堂さんのこと、俺もずっと想ってた」

と昂^{たかぶ}った声で呼びかけて、バトンパスをするかのように全速力で熊埜御堂を追いかけた。

完